改正三河後風土記

拾四

第四門
貸出期限 年 月 日
返本期限 年 月 日
返本 年 月 日
210
ナ
1-144A

改正三河後風土記巻第拾

目録

一 三州長篠城攻付武田勝頼加勢之事
一 馬場小山田小畑退陣付長篠城之事
一 奥平信昌家付滝山軍之事
一 遠州犬居郷軍付勝頼出陣之事
天正三年甲戌
一 秀康卿御誕生付御祈願長篠院殿事
一 勝頼濃州軍之事
一 遠州乱亂多軍付菅沼新藤軍之事

愛知県文化会館
昭 33.7.30 和
35957

~~A25~~ ナ ~~14-14~~
A210
1-14A

一 三方天神城を攻る事
一 勝頼天龍川陣を遂退散する事
天正三年乙亥
一 連歌會遊觴を井伊谷に催す事
一 奥平九郎為長篠城を氏去る事
一 勝頼三州に出張大賀弥四郎を誅する事
一 織田信長長篠城を攻る事
一 多居城落忠死を武田軍聞く事

改正三河後風記卷第拾

三州長篠城攻武田勢加勢之事

天正元年の六月武田四郎勝頼父信玄の遺言を聞く信玄の喪を深く秘し三年の間は病気と披露し跡を定める事なり武田の家臣は勝頼の子太郎信勝を推させ其外は譜代として軍国の謀りを決定し信濃国高遠城を高坂弾正忠山縣三郎三郎内藤修理亮を集め申し合せ上杉と信玄の志を継て東国に軍船をさんと思ふ

評定に馬場信房・坂山縣内義が一回より
信房は先君の仇敵を三年の間は押色を
三年の喪に蔡礼に従ひ甚だ一歩方
寸も動かざるを以て信房の孤へ若き遺
ひ此れ世に一年の間は民を休め
兵を養ひ給へと諫言を長坂
長坂長入道弾正忠大炊助勝賀を
を召して我が心は以為形模以為と家老
分別との言葉なく者ども順国伝濃
孫の上野三河遠江五ヶ国の人数をは
休め甲州勢計りを二年にて山縣

三郎兵衛をせんとせれ一定山縣内義
伝繼一統伝達一除事を変伝濃を大将として
遠州に働かせ一度一又此頃
徳川家長篠を取詰むるはかりもは
一ヶ月は馬場兵部少伝房をせんとせ
曲輪伝豊小山田長篠伝義を大将と
長篠の後詰を以て出なされ此頃
いとやはり 此長坂と跡部は信玄の
御子はさして登庸もせざりしの
信玄の死せし後ようけ者の無礼の
事小姫過ひ頻に法華の法を申せば

勝頼大小拾八人は名二の部屋人と
なり窺伺しなをはるはる軍機して
吉光の家は代代武家名家なり新合戦の
ふ紀ものを計ひなり勝頼是を見と
思ふ一国中へ書留しうと甲州
よは信玄の死也しうり古民一統何と
ぼく力戦ふ心経しなり勝ものハ
有りしく見へよう　徳川家の方
小は此六月中　二股城の押として
西郷山編年記書略二ヶ所の西郷城
築うし此時長城籠を守し

神君軍勢引具しなひ七月十九日
長篠の城を攻囲とう城と菅沼新命
西貝田州ちの加勢は宝蔵一部新
小泉源之丞吉田の馬場神りなて吉も
せた家ふ城を火業戦命へ射入きし小
ちを火二九ふ焼身おふ南風強く火勢
烈くなり二九悪く焼立たは城中
将卒活気なく本丸よ入て戦へ入て八
計様急なは義百一きてとく
神君は久留中山ふ西郷を築うしめ
酒井左衛門ふ守しせ菅沼新命も

加賀へ越て敵を一先演松の郎党
の長篠城へは演雲斎を始め諸
攻る由甲州へ注進を遣はし郎党
等へ談じ申せしかば加賀へ越て馬場
弟濃守郎田豊後小山田弟兵部丞
三州へ發向せしむ馬場は
二上山の陣へ豊後小山田丞は大豆坂
岩代川の陣へ久右衛門尉小田切
酒井雲州厨蔵右衛門尉と申し候
合戦仕候

馬場小山田は退陣

長篠城へ

甲州へ長篠落城の注進
風来るに二上山の屯へ豊後丞岩代
の屯へ久右衛門尉の陣と申し候
戦ふ事少なく候
神君も全く演雲斎作法馬かた
馬場小山田の備と対陣しかく
る馬場弟濃守の屯へ二上山
地理悪敷く候間こゝを
御出馬なされ候へ
馬場と長篠の宿陣へ

討ちかれ備へ陣を設けゝり味方の
陣は松葉を多く集め山の如く
積重ね陣営を自焼して軍我
帰れは雅楽馬場ら討ちかゝれは
川を越え討ち入りしと伏兵を三所に
埋伏し一二の伏兵をやり過し三の
伏兵起立て立切りて討亀しと
陣を定め待受志摩は馬場
切右の老将らまは味方陣営の
畑を見て焔の白く見えけるは陣払の
畑にけれは鼓備の陣を設けゝり

味方我川を出し戦んとせしか
ところ岸を割して兵を一人も出さし
然るに此時小山田の兵士は滝表勢
にまると見へ登り追討せんと五騎
三騎にて登み来る我味方の伏兵大小
起り図を揚て討て廻り志摩れと
此兵悩り早く起り立しかは甲州勢
早く引退けりしかは討取る者
少しとも甲州勢は長篠の涯に
引退き雑兵を打て諸軍を退散と
引退く　右書けるを長篠落城とれ是は編年の紀是なる如く存するは収む　八月

八百八ヶ所ヲ編年 長源院ハ甲州
野ハ無限也 ヲ為ヲ ヲ ヲ 主ハ
所ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ 法師の馬場
小山田弥三郎 ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
甲州ヨリ加賀宮ヲ一条ヲ ヲ ヲ
年 ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
神 ヲ ヲ ヲ ヲ 大雪一尺ヲ ヲ ヲ
ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ 菅沼
ヲ ヲ ヲ ヲ 神 ヲ ヲ ヲ
ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ

ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ

要平帰し来り滝山軍と事
長篠籠城の諸将皆城を囲み逆
をはげまは典厩馬場小山田七郎が大な
誉し惜り思慮の深を思へ無よの
場を移給ひ惜りは甲州より加勢
とり甘利馬場をとりたてられ
甘利は勢を以て一場を要平道文
子兵部丞典厩孫九八郎あは分郎を
給居とし此要平を家臣旗として
一類に所きものなりは諸文
神君よりも新恩一ものと思召し

汎遇厚くとり給ひ一なるひ一の近年
給をうたへんを法く攻られて古く
なり給る武田方へ深く一きるなり
志を深く給を病死しせる九八郎は
儒門家へ帰参せんを願し譲父
ゆも父子と勧めたり甲陽の侍より此九八郎
を子孫多と聞き
計策をとらせ給ひ給ひの死を
去給ひ給ひ
其頃
神君よりの新恩豊後守廣勝新恩百貫
給優にとり帰参をへきとり給ひ
一は孫一郎お仕へ帰参の志を
攻し者り典厩馬場小山田は甘利

会議しけるは我〻人民長源義信
の者共出面する事なる故長源義信
せし人民の面目なく思ふ場り
御殿より中間〻屋敷や諸共屋敷
人民　　徳川殿と有之の一類
聯盟を変せんしるは甲斐殿
之を見るは　　徳川家右門前より
演説（帰陣せるる）　甚附者方浪士
加藤　雑兵と為る出て東西より交討
なるは味方勝利顕有る（こと）に決定
なる之を田崎の若江刑部の家臣

堪ず道理は要平の内意を知る典厩を
此〻に決定典厩は是迄の陣営小
場り是迄（要平兵隊を我指示
之の家臣我此時　けるる兵隊
少しも顔色変せしこと
敵より到着見張せる（　我いるも
二心此　　後者しるも少しも疑
やうに（其後様我国服を食
帰らんとおもふは典厩は疑解けて
味方の家来を殺らん兵隊を小諸
兵隊を其とおもふは我と驚きよう

討ち取り、お芝居軍功録をひみつ、
なると雖も、初を切みよたそうこの
郎れく、繁よる立場り英武よ為く
武田勢の統りたる和尚、勝地を去る
その名は一族男女武具名具面おも
第よ城立場迄ちり和尚よこてもり立場
甲州勢大小弾丸奥平道心ほうとく
大勢迫をうと石間金坂大岡紀石巻ふ立場
九八郎父子ふく迫一よ勢後よ二百騎
を以て立石の武田勢城ち殺り一族
男女金く岩渕山ゆく立迫く第く

内をなり、をましけまは
神君原浦の松平ふ数物伊忠兵衛
豊坂ち廣孝甚よ吉二郎廣金城
迫として老ハさまとも浦ふ
しなく者り　神君は奥平父子ち
武田方高遠の城内を一けまは
伊迫城ふ殺たるに吉川ち谷迫を
横金よ伊那陣ふ殺しよう武田方
思願馬場小山田甘利ち計策を変
なりて後悔なるとも其甲斐れく
聖百は平岩七ち物親吉内蔵金一郎

家長（源太郎）は接戦しかし栗平の方へ
出さぬ間滝山の業は要害深く
堀壁も厳重に設け八幡宮は栗平
父子加勢の諸将とそれぞれ演舞
をなす武田勢は小山田方利を始
め栗平まで一揆を起す安
房ぬるとおもひけれは八月廿一日
策略の堀より甲州勢五千余騎を以て
宮崎滝山より西へ向ひ栗平父子八郎と
少加勢の諸将の人数と合せて五百
余騎ばかりの小勢ばかり滝山は柵

一重の要害ばかりにて
ありけれども滝山の業にて戦ひ
さまは敵よりはるかに強く
なり甲州勢栗平の小勢なる戦ひ
なりけれは一揆を誘ひさんと思ひ
進んで滝山を攻る栗平父子人数を
少なく業にて切別れ敵をしりぞく
勝地業をおろし敵へは甲州勢
立別れ西へ向ひ栗平は切別
れ一揆一度に見せかけ多勢の
を退治をなすと栗平父子の侍士

田原坂にて薩兵甲州勢の中より
奥平隼人部貞色等二百人迎撃
戦ひ貞色等一先ず敗走人討死
たりしが薩兵等なり石川源蔵等敗走
却多豊後の策者奥平を殺さんと
軍勢我先にと進み策を施すなり
甲州勢帝の報を聞き大張り迎撃
ひ先ず不石川多吉が胴を撃ち
つけ敗走せし敵を殺さんと勝
奥平父子共に敵を撃ち策を施す
なり抑も甲州勢多討死
薩国の仇を大を設ち加勢の諸藩と
共連隊を八藩典礼をもつて
策を施す人々甲州の立
ちしと聞きては勝頼は奥平
貞能を父子なりの藩を指して九八郎
甲州より人数をしてお山を出陣
嫌を命又奥能貞能に求る千九百一隊
義を集貞治の女子は典礼の方へ繰と
しお山を出陣の上も回しく
嫌よりけしとて 薩藩の記小貞能の父貞治と三男八郎四郎は他に父と三男貞義を
常陸と云義を集と言ふ 甲州へ仕へ

栗平父子は家子おのゝ並勝軍を
怨讐とおもひけるとぞ
（長篠合戦編年）

遠州表郷軍付勝軍事

武田勝頼は長篠後法の諸将出張
以下、三河へ出陣する須其手合の為
部四道遠州信濃宮山梅雪山縣部兵
部等一隊奥州信濃より遠州へ
有て敵地侵掠せ絶者うとなる
遠州表郷より陣を張る
神君少の少石大須賀部
高天原小平太原政部多平八部

忠勝部多組奥の重臣より家康へ
四ひたる甲州勢迎撃へ迎老八十
しる城とし有ゝ遠州の
勢と合戦を結ひ遠州の人数
切員ゝ右往左往より敗走
ゝ山縣一隊宮山梅雪山梨本
佐ゝ在ゝ早ゝ二の敵ゝ
遠ゝ戦ハんとすれども源雲勢は
ゆゝ迫ゝ一面ける敵ゝて甲斐
ゝ陣ゝ主部信
（信濃の経ゝ遠州心変
信濃ゝ）（部四の部田
（組勢の部四平八部
信濃ゝ）（部四の部田
信濃ゝ）

九月

十日夜より城を攻め遂に新山縣宮山城の
城將小笠原の軍勢に勝利を失ひ
長篠も落城せしかば此度長篠
城を攻めしと津久井を攻し津久井
城主双亀源右衛門甲州へ逃去り
けるは味方の逃げしと甲州勢
数十人討死なり郡内勝頼は三千の
おんな百人の味方皆負軍にて逃帰り
長篠城へ　德川家の御手に入り
しを以て安心の事かなり風祭寺
迫を乃七人へ合戦をなし一揆を起せ
る者成業問者とかし　之を侵略
せんと同業院方へ向ふ棟村七郎右衛門
しかは風祭寺の業源の別当
安藤院法印と申けるもの形元年
三年　三年の合戦に忠義せし
うは百姓おされ門家人に加へたる
七郎右衛門と名乗らしめらるけるの一揆
とされ計業を少なく　早く涙雲へ
帰るを以て海也一揆国恩寺末
寺の一揆諸徒を　と仕けるの
此度業恩寺の法を四ら　其一揆

港に人をも掠奪し、須賀川城を攻し、
けるは大小所威を張り、勝軍の勢
を[illegible]とは、[illegible]も知られし一万五千の
人数に[illegible]、九月十日遠州へ[illegible]
[illegible]川を渡り見附の浜に陣
所し、敵大に天竜川の上流を渡り
須賀の城を攻んとし、御[illegible]も七月
[illegible]甲州勢[illegible]
[illegible]一揆[illegible]
けるは軍法[illegible]須賀城の
城を[illegible]池田表[illegible]

さの[illegible]の陣[illegible]の浜中へ馬を進め入り
生捕らるる勝軍の首を引[illegible]勝軍
は虜を須賀城中の有さまを四
[illegible]城中武具兵糧充実せ
のみなりし城を[illegible]大将の恩義を
[illegible]必死の精を[illegible]
[illegible]攻[illegible]
[illegible]武田の軍士を少[illegible]
[illegible]を失ひ勝軍は[illegible]
[illegible]山梨[illegible]須賀原の浜を
[illegible]甲州の[illegible]

城陽く長浦く急ぎ攻寄せ一人負
軍く山城陣ニ走り籠り候と諫る小
ち勝頼軍を帰しく二股乾方明
多くの拾城しを巡り一入坂の
切岸をとる付越川城を石川日向守
家成甚属長崎長市平とく渋地の
妙子ありしものをしく勝頼を
諫りし渋地をく討れらんと計りるの
馬場兵部丞元陳の切者へ佐野
長右衛門一生懸しも（甲陽の説ニ馬場は佐野長右衛門を
ハ大敵の者大将を失ひたれ
安房守勝頼を諫りたりと云
佐野長右衛門は出る諫る体
たち又馬場を入者る池田はいろよしてう
おかず一渋松を帰り此より中上原
佐ク羅を見さる所威を張りしとて
又勝頼は大軍を引く出城を越く
切岸く帰るとて合戦小
をしく流治原古城を攻落り
陽成の城を築一一と縄張を出屋
佐豊と馬場兵部小命ハる天神の
小笠原兵八郎は此城善信を好んと
人数を押ち一生は勝頼もせんを
ち長城ち一生城討んとて

然れとも馬場家は地の利を知りて
此方大軍といへとも勝難しとて諫め
勝頼をと甲州へ帰陣せしむ高天神の
兵も五六日戦ひて一戦に合はなるへしとて城へ
引入たりさりし此城落城せし
りは宝賀一家新入道小笠原与三郎小
軍勢多く俄に籠り居たりしが高天神
城を渡しし城側郎一命を入たりし
との計略なり

此条は原書に洩れしを記せし甲陽編年によりて補入

此一條長郷の軍は其業編年甲陽にも同じく考へ候勝頼が軍の

秀康卿誕生并御母長勝院殿

こ事

天正二年甲戌正月朔日には
神君正五位下に叙し賜ひて二月八日
には二郎君生まれ給ふ是を於義丸殿と
申し後に三河守となられたる越前国
を領せられし中納言秀康卿是
なり御母は三州池鯉鮒の人にて俗
志摩守小野吉英が女
吉英池鯉鮒大明神の神職後に村田と改め候
お万の局と云
神君の御方様山殿
乃方に召されやはらかへしけるいはしけ
御寵ましを受けて身重くなりぬ築山殿は

物妬深くおはしけれはお万此
ころ小方の御耳に入てうちひめられ
事ともを露顕に御懐姙ありて本多
豊後守か宅に本多重次といふ伯母
聟の家にゆかせられ志りくのまゝ
ほりと告知せ重其より本多作左衛門
重次に語りしかは重次速にて介抱し
その後お万をも宿に申しうけに
置しけるや重次か方に其後産ひまし
ほけるに濱松の城下有富見といふ
村にて生まれたまへる所なり

ましし御父子御對面もなかりしかさん
此子たりしほとはたまハさりしか於義丸殿
三歳のとき此兄岡崎三郎信康君
さりけしとしこしらへたまひ
神君と御父子の御對面ありし後には
御子なとおもしろくもおもひ親しく
思召たまひとそ伝へし
一説にお万は懐姙の子并出産
結城家を継たまひしかはお万殿とも
後に秀康に
越前にておはしゝかは秀康に小條

たるうしし　後に出家して長慶院と号し
歳七十三にて　なくなる　元和元年
十二月六日福井にて　終りを見たるなり
数多の女房の者は　暇を取らる　（紫式部伝　藤原信）

勝頼濃州軍之事

武田信玄入道法名東光院　岩村の城を
攻め　秋山伯耆守を城代と　信州
先方　瓜生原先手大将の者を　二百騎余指添　なるべし　秋山は
美しき　尚姫の　なを遠山内匠助の　寡婦を
娶き　妻とせんと　調ふ　尚姫を

多よ入　なるべしの　仰せ　なれば　彼
寡婦と　夫婦　なりて　山の　四方を　大
設　方形　秋山　我主人と　称み　万事
その　如　知を　守りける　此寡婦　瀬田源
内の　妻は　奴　婢　なりて　瀬田源
内　計　思　秋山　なれば　奴　婢　年
好　和睦　一家　親族の　如　を
結ん　と　給　語　ら　も　秋山
元来　浪漫　と　孤児　寡婦　を　誘
尚姫　を　多　入　なる　姫　お　場　女　城
甲州　へ　老　瀬田　源　人　愛

寡婦をば己が妻とし一尚樣を立て
波年を押へ居るこの外にをば織田殿
方をば云ふ源く怨憤らるこの
密を存じ織田殿の調命をば
かしと返言せしかども織田殿は
憤深けをば苗木城主遠山
濃州岩村城攻撃寄せ馬竜
の家戦後は兵衛佐方に織田殿
の勢十騎十五騎計り城を落し岩村
城の押とせり武田勝頼是を伝
聞長る岩村を奪取りてを
なりと甲州信州遠江三河上野
の五州の軍勢二万八千余騎を
引率し天正二年甲戌二月十三日甲州
さしうち給ひ十八ヶ所の砦を攻
り破り攻落しる明智の城小
城攻遠山要所を攻る時織田殿
城外信忠父子六万余騎波年の
城を取囲籠せんと給ひ
の勢は明智の四人衆
武田方をば波年より
備へ左衛門山縣三郎昌景宗寺殿お

然とも都合六千の人数にて霍田山
の方へ廻りけれともえんへかゝれは信長
をしてしらせしかも忽まちの勢ひ乱れ
らんとして山縣十七手一戦篠笛んと競ひ
甲斐の勢を奪ひ上道四里程ヶ所追ひて
川を渡れは織田勢は上道八里勝へ打
出て明智らは此勢をかへりうたんと
無地力に岩を染し引退く織田勢
より鏡を立てし 十六騎の中は其中
九騎は討死に勝頼極威ナリ落し
信州先をとして坂棲方の岩ハ此法

出ると名和に武理物井伊添也大軍へ五徳
ら之忠をたゝしめ諸浪人勢勝頼代始
の軍より一切をたまんと帷をたけかし
力我々にし織田家より殿虚小
鏡おきし十四騎の中は一人も残
らず討取り坂棲方大軍へ信次は待兵に

編年 信次内より出し[illegible]甲陽の[illegible]
明智勝頼の[illegible]
[illegible]甚欄名を[illegible]
[illegible]

これより[illegible]勝頼[illegible]権威
また悩ひ寄み甲州へ引返しに（甲陽編年）

壺州乱気多軍付 菅沼新城

軍之事

同年四月六日　神君は軍勢を
引具せられ廣瀬を渡り濱松と云
所より北をさして上せられは遠州國衆郡
乱の場に天龍宮門前に高兵庫
武田陣しるし　敵の色を見
なれは出をを攻たるとの
なりしかは敵悪面海綿をし氣多川
おかしら　堀内和田右衛門
のんなの軍士とも堀内氣多川の
上流より糧米用意をし　ひきこ八下之

濱松　印幡場河の両の時より及
無数印幡場へ　と軍法とよ攻
けれは大久保七郎　高忠世　水野忠重
後陣と好きを軍を返　たかの
所より氣多村の石川忠義を
印陣より来り　乱の場を天龍の
印幡陣の時山中の細道
一戦せんと思へ乱を
法をした天龍は敵陣より論所乱を
先へ　とした軍勢を急せ乱り
三里の間我勝　後陣の勢小笠原

挑灯をもって大久保彦左衛門多勢
大窪の宮ヶ瀬の小道にて宮内
頼を追掛ふとの時杉山三郎
博を田野大窪の村民と一同に
討ち取る中に信濃の宮内
彦切り合信樹宮内ハ鉄砲を打ち
ぬ四ツ塚口へ彦左衛門のめも見へぬ
岩石の谷道さく形死山中へ追落
合戦をもって信方大久保勘七郎博
平十郎同小右衛門彦兵衛小原
金四郎をもって知人家老の中共四人

討死せり大久保七郎一蔵小仲間三人共身
体を捨て安戦ひとの時林小平太
兵衛と名乗り至て横合より寄て
をもって伊東清水以下の者共同
雪崩落し高彼所頼を辞者して
是を乱し敗走せり敵追ひ
頼の首三十級取る大久保彦左衛門
よりも二十級捕る
神君は軍に三方山中に引取る
信濃を始たるの知へ諸将追撃
見届さる叶計要害の地より出

とゝ早く天方の城へ引れたる由
乳多村の百姓ども城は御案内場
忠義を尽せとゝ此度よりの乳多村
御退口の殿小忠死せ——御家人遺頼を
場ふ不場平十郎は敵人討れ
敵死よりの三宮山入口より前余せ
らは殿更御懐に添うしとゝ子を人も
玉者もはそれの父平蔵入道小御書を
場ふいとを敵をつゝのしう

場平十郎討死の時遺頼を紀信
為彼蓋棺安堵に内浪敵子豊之

南方有中絶拍子内紀信平為
至家之図如志し寄頼為不入お利形
写永諸及今見評を平玉ゝ添
ふゝゝ遺乳者人仍解

天正三年甲戌十月　家康御判
場平蔵入道

今の世ゝゝも三州大樹寺の所蔵より
平十郎の墓ゝ——殘ゝ西前心光と
云法津を此見けること哀形を見
ゝ出よ菅沼新八郎定盈は脇四郎を
を年——佐吉よ源——ゝ見ゝゝ甲州勢は

川を切落さんとせしも元来肥四八要害
の地なり此度播磨浄土寺の四郎大膳亮
新城を築き信長せんと新しき御
評を為す城普請しき仕居せり
武田陸奥は東国隈の勝軍なり益
傍若無人大小驕慢しき天下
我掌中なりと思へり
長坂釣閑斎叔父大炊助の侍人近合
しき其恩賞長しけれは深き
用しき此の度なり五月廿八日
又三州へ發向し菅沼新八郎の新城を
攻落さんと演出の却て思敵馬場
兵法保科弾正忠を指向ふ
菅沼刑部の菅沼
山縣三郎兵衛小幡
右の者
新城へ大軍を
の者共
攻敗れよ思ひ
告
新城は堅強といへとも
人数多
大軍

早く立退き申べしと家居とも
一向に諫しては新八郎も心服し
立退いきしを定め申さるべきと敵は
山縣の大勢にて攻寄たりとしかう
新八郎怒りて厨に居る者
溢曲をうたひかしまを面白く唄ひ
おたりを山の陽を作り口ずさみ
酒ひ宴として馬を乘り南曲輪
うろおろうろ士卒は西に我家に
火を放て般若の雪我忘れ
かけ小姓中山與六はは十六才某

果ての城へ立籠り家不の火を
消防を始め諸人おのれ
家を捨て戰ひ討死せんこと惜むべき
者なりと中山右衛門は新八郎の人數
乃後家に退きたる吉祥山の
樓に籠り菩沼刑部は近く近寄
きたれば近しく刑部の場と戰ひ力戰
しく討死しぬ新八郎は
西郷西口と云書
山縣を出でとしく遠延き
しる新八郎は西郷孫九郎家負と
頭に軍を

軍勢城へ会せらし諏訪を動し
大井川より諸道へ矢地発し
所々多く討れしかは山縣も軍を
引返れけるより勝頼は吉田二連木
をへらる遠州より入り濱買坂を大津
とし高天神を攻る用意をいたされ
けれ 乱記多くの一件の軍は春業編年甲陽より攻出れ
大三河志編年に補入しぬ
一高天神落城 付横須賀新築
武田勝頼は六月二日より遠江の軍勢を
出し一高天神城を攻囲む 旧説勝頼塩出山に
天神名つき従乱 城主小笠原與八郎長忠 長忠氏
武功を依の宿將謂渡辺久世三四郎
座間坂部又十郎正家本間八郎三郎
丸尾修理池田授平孕石永林永田
吉郎左衛門櫛谷吉左衛門松平物兵衛根
源太夫海老名太夫木村長兵衛中山
是非之助赤堀志摩之助まつえ人
當千の者を籠り大河内源三郎
政局入道は軍奉行として諸口を廻り
下知せられは山縣小笠原亦の甲州
勢も攻めあくみて見へけり

木戸我家く寄せしは高手数にて
攻寄せんとのむねにも駿州先方衆
兵部丹波國次郎左馬亦は與八郎と
今川家より勝しく四友將士は
主ま名を取り調をうけ拍合ひし
鐵ひけるに與八郎よりは向坂牛之助
光りを以て三河の援兵を請ふ事
神君早速御出馬ありしとの御
返書まてく使を返したのみ又小栗
大六重常を波年へ遣八され御西東へ
加勢のうり信忠信長竹中ひ

勝頼是長より城飼郡にかゝり
然る所の幸ひなりと城主小笠原
乞數し出馬し家康へし岳並へし信長
扨りし徳門殿兩旗にて
勝頼我討止し此後長く濁の根を
断へしと信忠ま尾濃の人数言
余儀しし遠目高天神後詰の為
遠州発向ましへしと網後さる遠松
より此報を城中へ遠しへたのみは
與八郎も城主も撤毎戰ひ漸失地
を乞ひせ木石我投下し岩しく

防戦に又打ては海の合戦に林
平六吉原又兵衛伊達要害に小池
左近久世三郎坂部又十郎小姓を
搦て家うを大勢を切崩し家を
先陳の甲州勢迫川迫川を
合戦に城を立て人討死は家に八
二百人余討死らる中の手勢
必切らんと池の堤を切り落せ
ども七井田畑の水多くく城を
文小渕せに陣取る徳田
徳川両大将両陣ともく迫り攻落

打ともるのせくく真昼のもせく
攻落せて十八日は西郷村に諸勢を
先中村に十文字の諸押立て
自分に戦場攻口に家なくく
うはに攻あよし事如を加へ列く攻寄は
諸軍息物もつに我攻に攻入て
宮山橋寄は乱の出ようと人数を
山縣は大手より責る也内藤弟は
大手搦寄より攻入なり是弟部寄
兼田治部同忠治部子郎小姓
全家搦寄の口を家破り城

に付押入れは城を捨て逃去りしと家臣
治部余党は討ましたりさましと
家子は所来兵甲を身よせ精垣
を破ると兄へしゝ城より二重の狗壕
切らく落せは家子出先の兵は微塵に
砕まし失ふ者は家子兵を辟易
しらし返ん馬場山縣内藤なと古老の
その大勝利を待ちてやけ家ハ此城の
形勢中に危く落へ至りえの写り
織田　徳川両将まり援兵有らハ
家子敗軍疑もし兼て必然なる知

与八郎剛勇勝れたれ共操不足
せり義心篤けまは必利欲深き
ものなり元来原と小笠原両人は
城明郎を押領せし如原は既絶
せしは与八郎一人より甚助を
知りし返来今川と縁を結ひ
甚滅をとり中平には権勢を振ひ
将にゝ今川氏ちゝ衰運に陥いつゝ
敵となり　徳川に随遂ん引
其義知らぬその将まは調義安に
へしと申せは勝頼もと同意し

近辺の領を侵さんと城内へ申遣
りたれは無人部に雪霜少しも無
尚附き双の弓矢のうち忘るる大軍
囲城日を経て苦労なりとも信長
表書第一の武人　徳川は少々
も力落ちに成結を頼ぬるとも
頼ぬしうしに成
徳川の恩顧被有と云ふ此上は武田の
義理既義の苦辛なる一度の義理八
孫達のけとは一生の安危をもう
子孫者孫の苦楽なれおもし早く
時刻に一味し城を開き降参なれ
此城明渡りなれ別に一万貫の
地を授ぬしそうへ籠城の法辛
苦なれ如安堵せしむへしけれ
更に偽なあるとも無しに別を
慇懃なし又時頼の智謀に倍大勝
なる智謀を深く送り者の無部
元来勇者なる義なれは演無の
加勢なしまは我なる
徳川殿我が天王山城川の忠切
をは必なせらるると云ふのなるとく

然候ヘ共合戦たるに付て勝頼の利を
以て誘引せる城攻し故と申す
味方と申すも我国の敵し仇を小義の
為に宮内家門を滅却せんとせ
ども源氏一族の内に武田
武田と申す人物は源氏の嫡流
武田方清光より横田高五郎平松兵
衛尉義政一族無八郎為時と
富士郎鷹栖と申す一万騎の軍勢を
授く時に源氏合戦中山兵部小輔
家綱朱無八郎と同じく武田源氏

とも申すは源氏を合の北を無八郎甚平
小太郎久世三郎左衛門又十郎等義を
守る故なれば源氏の城を攻て退散
合戦に及ぶ時世上に武田
陸奥守義光の弟新羅三郎義光
遠州に引籠る者を東退と云
西退と申すなり大河内源新左衛門
勝頼一信の軍勢を以て拒ぶ
義を守る源氏に成せ
ば勝頼
怒る城中石橋の中へ押寄め甚
戸を頂く重き同十八日に八幡田殿

父子二万余騎にて三州吉田より
岩津へ出られさせられ與八郎と與源
のうち脇を固め　神君は織田殿と
逆たゆひ與八郎云甲斐なき不覚の
沙汰なりと無りせたもひ信長
是もまた名馬の名誉なれ尋く謝し
信長は勝利をそなへ直ちに
働くとしいとも　徳川殿極勇者
以て押たまふ　信長東顧の患
なく　後を中国の揚信は
全く　徳川殿合力被申の故と

尋く謝したもひ又一面年は三州
未稚不熟のようにみたゆうたり
是は軍国の用意とおもしたもふ
面しかる　黄金二領進らせられ
其後代官を　力士あ人まで御
捧げ申しとて織田殿其後八吉田
城小家たゆひ城を酒井左衛門
忠次種く答礼　吉田織田殿
忠次を貞宗の短刀をもひ織田殿
父子共　一日波年　信長公十六年
神君も源氏の御子孫

（註之源氏相小説也）

豊後へは勝頼は七月より又甲州へ
帰りけるこそ天神の御塚となり
けるは　神君八月二日より馬伏峠
の四墨を新小御所せしめられ大須賀
康高二万石を以て天神の
御塚となされ塚番とす故に源系
せし豊州諸神に比たる久世三郎
坂郎又十郎　鬱心院郎　源頼朝郎
筑紫郎　松浦郎　海の郎　吉郎八
丹田宮十郎　高根源太　小笠原長治
大石新次郎　門奈左近等なれば皆
勝頼の家臣なりと雖とも世
世に埋もれ居るを厚士とせしを賞
小は塚明郎一番より始りける
此時より塚明郎を塚東と改め
馬伏郎を改て塚頭賀の塚と称し
塚頭賀二社大明神を五畏一神四
郎物石を祭る所也此地は古昔熊野
の神頭なり地名大宝の昔より
熊野をうつし祭りし所なりと
なり

（続業日記）

勝頼天龍川陣の道筋の歌

江戸物語

九月には武田勝頼二万余の精兵に
跡部長坂が條鋒を用ひ又
人々は須賀を攻んと強更
猛悍の精兵二万騎を催促し
遠州へ發向しけれは連日大雨降續き
出ては天龍川水漲り海のことくを
滿さまは川岸に化せり（原書天正三年六月とあれ大風雨也）
（此時陣勝兵の日記は よりて家に收めたり）須賀には大物見んとて
大久保七郎右衛門同治右衛門鳥居彦右衛門
内藤三左衛門同四郎左衛門村上彌右衛門
日下部兵右衛門加藤喜助山本帯刀
勝部小兵衛本多平八郎青山藤七郎
河野岩九郎高木九助榊原隼之助
宗田七九郎天野傳六郎小栗仁右衛門
梶金平酒井與四郎滋野七之助
都筑平右衛門松下加兵衛以下僅に
二百余騎をもて向ふ武軍敵の大軍
川岸に屯したるをみて敵川を
渡らむとせは其渡る所を討んと
河原表に馬の立場を残して扣たり
勝頼此形勢を見て佐藤波一両手
（伴藤の河也 の瀬流）若殿將たる決戦の妙手を進八

けるものよ作し川を渡る渉船をうたしめらる川幅遠よをうりけきは四方を見張しけるや其夜四方の岸よ在る所の川面三分二減く河中小流たる渉松勢の中ふたり雄の若者も大音揚て武田家の軍勢は敵をうつまへを知さるや河中をおは河伯水神の怪を〻此そと怖り胡蘆宣種を敵よ投る船中ふたり怒り急よ川を渡らんと矛を擬ゆ

とる河水流をやたるの矢を射るうさとく形り清淵は幾らん諸軍見給当時よ是四方ゆる敵勢の水流み流をうつ渡らは渡らしくんへしは板垣信形勢信濃の勢の中ふり宮脇弁志村全蔵平京義義河路勢の兵五騎雄を地ふく馬を調と赤入をたり是をうく渉松勢の中ふり多居彦蔵の大以保左郎蔵四治左蔵小蔵を並へうは四方板垣勢叫りしうやあるしうん馬城京郎

其時甲州方相模勢強く成氏郷ハ
陣ヲ前橋ニ置き石原右馬助能登守
を迎ニ行ク馬を頼と共へ遣て渡ス
流ス際ニ成氏ハ勝頼見を見て彼
方の方ハ必死の心見と見へ申ス
彼方を討せ給ハ和睦なりと自分
案記ス勝頼ハ無し之ク馬を共へ
十九騎勝頼ハ無し之ク馬を共へ
たり給を見て馬場山縣を始二万騎の
甲州勢一回ニ寄へ申ス小笠原與郎ハ
敵四方小陣ニ寄ル軍を見ハ

討死せんと申ス中渡を渡り渡を
越ス申ス岩山ニ寄ル高を申ス時
神君ハ濱松ヲ出馬なて天竜川
向ひたまふ訳ハ勝頼ハ大文字の諸を
所渡ル七千余騎を分ク所月文
四千余騎城ニ小天竜ハ備
たまふ酒井雅楽頭石川伯耆ハ桜井
左近忠次ハ二千余騎を渡ル
ル流ハ渡ル会戦の最中小
横渡を入まんと扣たり勝頼ハ
渡を見ル敵ハ渡ルと見へ申ス

軍を率ひ、しと山縣之郎之郷
小笠原與八郎を後詰とし、信濃軍
京兵衛尉也、相模守殿、池田の郷小
川入道、二段の構井伊谷を巡り
信州伊奈へ馬を納め、其須臾際氏、
信玄死去の風聞、虚実分
なし、若信玄の死去実なら、織
徳川の勢、遠江へ攻込まる、
澤田　徳川と一味して甲州方の
須臾、我々入国の事を形容し、
虚実を篤と見届申べし、相成入道、
令し、甲州へ出、甲州より信玄の
背出道、信濃見信玄の面目、
能似たるか、面を紙を
黄帽子を冠せ、
屏風立回し、其中に
燈を設け、
目我を、
連居たり、出道、

けよ　新しうかゝく物語しる　婦
あり江戸新も　智恵深きものなれば
面白　灯新のくらし　顔色は
能似者　江戸新　実ゝ　信長　存生
新しれしとゆふ　氏　改も　見我
実ゝとおもふ　甲州と　切りは
延引せり　時業編年

速歌　雷鳴　井伊万千代　登庸

こゝ事

天正三年　乙亥　正月十七日　天晴　三郎　三郎
家康　古代の　婢女　美　速歌の

歌句を　見事

信長　前　十八年　百ぶりは

此女は　江田舎の　ものなれは　文字さ
書　清　あ　ゝ　速歌　平　と　ゝ
さ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
美　志　を　婚　事　は　ゝ　ゝ　ゝ
い　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
燭　美　な　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
神　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
神　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
なれよ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　正月　日　江戸　興業

此歌の下句大海道遠境の海路をもめ
遠歌の事を云へり此句歌意句
と一百韻の連歌異り一たゆ
あ所是にて世々に心月に連歌異り
せ〻海に澄鶴と也へ今所
（為安元年と云は異説なり連歌なり）
（今〻心月世々に堀河なり十歌なり）
（所名百首なり十百と後なり）

按ずるに 印南家心月に連歌始の
澄鶴は 神君印誕生の前より鶴
大明神廣忠卿の印養ふ
神この長き源世を守るべしと云
句歌印感得有り 大海の海路

百〻連歌百韻異り一たゆ
一小記ると云是記不連歌者流小
伝ると云是記不連歌者流小
伝ると云是なるべし一説也
大成記成績藩譜編年考諸古
時歌澄鶴と也所也へ 和文小は
記一説伝云歌
玄蕃頭四郎こと右衛門 橘範
松の千年の色はなほ〻〻
又伝云死を重年一の春云恢洋心
義歌
家光の心の松のえん千代の玄

と見えさうしるもはうは武蔵国と
まる時は頼朝詳ありと云へ共彼
ようく皆是おほちけの子なれ
さて二月十六日　神君甚頼朝卿を
成らせたまひしかとも人の
容貌都雅なるの御道の例
ひろく伊者のまとと系統の
けまは松下源右衛門の子なりと云
さ所と修利小太郎は印幡
の後彼童子成長まして北条
下さましうは松下大よ修し早速

印城へ回道に其者を万千代と
云さう也よ万千代成長の後
時よ指五郎なりと云容貌の美麗
なるのみならず生得聰敏にして
心忠也なりまは勢附も印膝の
もれさまに印寵愛他ことなり
或時汝は松下の妻の連来りしを
なりとやものなり寵の中絶色
やをと仕なりしは云ハ源三郎
介川殿桶殿同ようく討死の時井伊
信濃守也盛回ようく討死をしは

葉の父肥後守重親、葉の婚姻を調ひ、
彼宿小肥後守と申す者、源氏の
氏長者にして、父重親は、永禄元年
九月廿日、病死す、葉の母
葉も討死申へし、此時新肥前守
そうそう、御免をこうむり、武蔵の国
古馬場の住人を受の郎党、
しく古馬場小四郎の娘の婿、討死
仕る、其後は、古馬場の妻の元へ
出入を、五郎よりも、居住し
氏長、又いつかの源氏を、少なく

あん井伊の小姓を、深せしと、葉を、尋
ら、古馬場の叔父源左衛門の伝
しは、古馬場の妻、叶伝を、
をは、古家させんと、伝の元へ、
其伝の川長、
葉を、捜さるるは、
志の家、永禄十一年、今川没落の初
彼伝、葉を、
三州風来寺へ、逃
ありしかの、新肥の妻、松下の娘、
逃亡、ありし、松下の娘へ、葉を
ましゆ、ゆえて、
葉ひけ、は、今は、葉も

松下之子のこと〻くなりぬとや（井伊の新は新しき時代の意味なり）

神君少年さうは

井伊の弧子なれば不及の

ものゝなれとも十五歳より深山いつくを

はつく別仕はつりける渡なを者

のるまゝ年齢の人を勝う赤

頭巾しまき冠量なりと思め

今まは井伊の御の口願井伊谷を

一番乗一番頂なりなれば彼井伊谷

三人流迫義愛し秀用近来年来

（秀用は父の遺用父の遺用義愛は父を殺せし時已に死ぬ）

黄泉二郎左衛門

立治左衛門木俣清左衛門守隆榊原

治左衛門西尾義次等の面々万石代を守立

命せしめける（松平家康）

天年九八郎賜長篠城（長篠城は氏真

の城なり）

長篠城は去年九月より御家人

交替しく勤番せしを今年二月

廿八日天年九八郎小平太忠次

九八郎の嫁光の妻を預一族を離

父兄他出父子打つもこの長篠城

あるべき所方よりあるべき志一方ならぬ所感なり其賞賜あるべきなり

今川氏さいはい

徳川家の使者

なり用日を送りしに京都よりは勝義

語りかたせしに彼はこれの友なりと

有るまじきは流浪人なり有るべし

ときやうの日京都より細川

けり細川伯長卿も打つて上洛

せしめ相国寺慈照院よりおもしろく

氏さこの月十六日伯長卿祐順より

祐順に渡す紙の石摺帖と名付を

献じ又先より千貫の香炉を献じ

是皆今川家重代の宝物なりしを

国共日ゆえ伯長に奉る氏さいの御論

旨絶のうをやはりしたなるべし今日

少弼殿有るべき之源大納言寛政に伝授

をもしめしたり

五月廿一日九条殿

右京亮田舎出の月卿雲客と国く

拝領せしに居屋敷に来臣に寄

餐意を盛延時に其うへ其の

人々と国々御論の場に列し

飛鳥井某家のあるじは信長卿
をたのしみ見物の諸人皆感賞せり
去るほどに氏真の様態飛鳥井に
劣らざりければ古今稀なる鞠足なり
とて信長卿も感じ給ひ諸人
声をそろへて称歎せざるはなし事
終りて氏真は信長に対ひてとりく
引出物せられしに氏真も同じく
饗応せられ恩を謝して退出せし
其席に木下藤吉郎秀吉出仕せしが
氏真の父義元は信長の為に討れ

しかば信長卿は全く不共戴天の
仇なり父の仇の前におもねり諂ひ
蹴鞠を弄して御覧に入れ又こたびの
出仕なりけるに秀吉に所作
是ぞ武士の心得なきは何の心
なれやここに先祖より伝へたる駿遠を
両国を信玄に奪はれ漂泊の身と
なり遠国を経廻り恥を晒し浅まし
さりとは気の毒しく嘲ける（藩譜 編年）

勝頼三州出張付大賀弥四郎が事

徳川家長篠城を奥平九八郎に譲

甚だ多く安からぬ
ものなれども四月晦日又二万七千の
人数を率ひて甲州を出で信州を
廣く遠州平山城を廣く三州
八名郡宇利城を落城仕候
德川家より大賀弥郎左衛門殿
ゆり之助殿一百騎ばかりの方先を
北方の方へ進み義勇を能く
抜き出でられ敵方の方へ進み
会津の方より用心の為に進み
立帰りは三河国額田郡
動揺の村の

代官仕りて濱吉右衛門殿
殿様にも時しきりに御感
動なれば今は何方へも
なくなりは一日も叶ハぬと
思ひ召されし人とて
けれ共十の者迄奢侈に
いつしか遂に思ひ立ち
三州へ出陣を幸ひと思ひ
勝頼殿朋友小笠原
小田八郎を語らひ一味
書面を勝頼に送り

設楽郡[illegible]山馬を[illegible]
先を二三隊[illegible]進めたまへ[illegible]我
[illegible]　　德川家の門出なりと[illegible]
[illegible]の城門を開っしむ[illegible]
其時少勢[illegible]
[illegible]せんよりの[illegible]
[illegible]は三河の人質を[illegible]
[illegible]は此人質城[illegible]
[illegible]多くは皆[illegible]
[illegible]　　徳川家も[illegible]松平[illegible]
[illegible]尾州の勢[illegible]

[illegible]は血[illegible]
[illegible]
[illegible]は大[illegible]は[illegible]
[illegible]十倍[illegible]
[illegible]
[illegible]山田八[illegible]
[illegible]　　悪[illegible]　　利[illegible]
[illegible]大[illegible]
[illegible]

なり若山銀次郎は四郎左衛門と共に
宅へ参ハさうとして其人を探し出
秋くれ相撲の御を少うし先なる
へとやけるもの伝蔵者弱きなるハ
四郎左衛門を八郎右衛門宅へ参ハさせ窺ハせ
らるゝ者をハ八郎は孫四郎小ひの
一味の者を拵へ其浦男を拵へ
四郎左衛門少うし立帰り高田中ゆゑ
久兵衛伝蔵者より逐一演説へ伝上
らるゝ伝蔵大賀孫四郎をハ呼寄
明まり大呼孫兵衛

果て翌日大久保七郎兵衛忠世より使
ら者大賀弥四郎を会志原へ
礫ようけ御孫四郎をハ馬の立の
方へ敵をもけ敵より終り有溝松中を
引と会志原へ其ゆゑ礫より掛
しを敵を見せ後呼寄の明日より
生れ付ちよ切ゆゑ竹蹴ゆゑ首を
切らしめらるゝ七日に及て死たり
しとて小笠原兵庫は陣中に少義を捕
とゝ行向ひ者を逐おし天竜川を
渡こゝに二度の場より入り終より甲州へ

迎去たり[illegible]平[illegible]は[illegible]村[illegible]
大[illegible]伯[illegible]討れり[illegible]山田八[illegible]は[illegible]
有[illegible]孫千石[illegible]ぬるは[illegible]
田忠[illegible]

[illegible]

[illegible]

勝頼吉田軍[illegible]攻長篠城[illegible]

大賀[illegible]郎[illegible]叛計[illegible]
孫[illegible]伏[illegible]

勝頼大[illegible]

[illegible]

[illegible]

小山田[illegible]坂[illegible]賀小[illegible]相[illegible]
[illegible]二千[illegible]
又[illegible]城[illegible]設[illegible]書[illegible]長篠小[illegible]
[illegible]二百[illegible]十[illegible]山[illegible]
七十[illegible]
姥[illegible]懐[illegible]三枚[illegible]三十[illegible]
[illegible]山[illegible]和[illegible]大[illegible]
二百人[illegible]医[illegible]山[illegible]
大通寺[illegible]山[illegible]西[illegible]

根達を以切寄せ候ハ、墨形くゝ
通し候くゝと見へ申候ハ、六月六日小
牧表御陣ハ一万計りを引くゝ浦賀
郡二達木室飯郡牛窪を放火
馬尾の城を切崩し東三河の用水
絶たゝ軍振させ三州岡崎せ
めんとの悪作形を企を浦き
たまへんと　神君吉田へ御出馬
ゆう後藤君は法蔵寺より岩津城
後た御ハ吉田の城を酒井左衛門
殿は大軍ゝ小山ゝ登り鍬を
仕掛んとす味方は小勢形を見て城中へ
引入守備を設く戦ハ出るへきし
ゝ中上候　神君と御問答
ゝ左衛門尉を後殿小引入ゝ
知山縣之郎左衛門五組の人数迫寄
喰留ゝ鍬ハ大津土佐守左衛門
ともよ引退ゝ敵を追掛ゝ
鍬形ハ味方城中へ引入ゝ
堅七日ハ甲州勢吉田城を取囲む
左衛門尉門押寄ゝ富ゝ御山縣ゝ
屬長左衛門尉郷左衛ゝ濃を合せ奮戦

ありけり、穴山あるひは山縣とも組と
うけたまはり馬上にて陰を合せ戦ふ
古老等は敵之科備を定めて戦ひ
武田信玄ハ広瀬之科後ニ井伊ニ居せし広瀬与左衛門之科肥前とも
其時小幡
無二来戸田左門海をかすみ御旗本
乃勇士之猛余人寛くおゝせを追掛に
之家に寛三ら兼敵之を殺き中にも
広瀬郷左衛門馬を静にして家
因し小丸九郎武者振敵味方とも
天晴の勇士なりと感せぬものはなかり
あり 年号大成紀家忠日記に因て御宴に
宴に

徳川家普第の士小栗長三郎と云
ものあり近年御勘気を蒙り甲州に
身をよせてくらし居たりしかは勝頼此
ものを召寄せ尋ねし
徳川家の形勢を探索せけれは此者
御恩忘れかたく当年八郎によりて
御先手に勤めは其夜間をはなれてし
中村八郎其旨申上けれは早速
御家へ申さんと御宝ひ端り海を越て
織軍へ中さんとは信長出府四方に手配
多くしらく長篠の加勢付候しとの事

[illegible]雲の[illegible]の[illegible]は、[illegible]信
[illegible]思ひもよらぬ[illegible]田を頼よ[illegible]
用心のみしつゝ長篠は是非なく
捨報ずすべきなりとて[illegible]
計ひ捨けたる[illegible]長篠の[illegible]は[illegible]
九八郎の[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]
家忠[illegible]　[illegible]　[illegible]
大軍よ[illegible]
[illegible]は小栗長[illegible]
[illegible]長篠を[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

大手道に井楼を搭し城内を窺はんとせし時孫九郎、命を討ちおこすと敵に通じ敵に見られん織田家へ小栗大六を所使し加勢小勢を乞へしと伝聞ハさば伝長必ずたちと返答ありしかば加藤小勢を乞ひ石川弥右衛門と云ふ伝聞ハさば伝長ハ早く勢を乞へしとは返答を聞かず急角道にて及ばず神君後詰ありよ九八郎討死されてハ

論ぜしに所存なりしと見ゆ後詰をしと伝聞ハさば和睦を乗ぜ滝中に又小栗大六を改年よ聞ハさば伝長閉じ十二百小勢年物を却さる（要略編年）

按ずるに伝長郷村清村を集め長篠加勢を乞ひしと評議ありしに毛利の内は敵に成は大軍なれば必定信方負なるべし四郎馬ひ宮内なりしと伝長方も要は信方負軍は疑ひしと見ゆ

少郎馬左ヱ門〜〜といふものを
いうかしと等ふ所ゝ〜〜ケ敵かなきを
さきはせ　　徳川殿田一味〜〜
なる〜〜　　徳川武田一味〜〜
なりは尚武を尤〜なりい吏も〜
味方員軍と知るゝ多勢なるを
計へ〜ふしたゝ　ひもは信長卿は
面白き能なり迚南津〜定ん
らもしと云説なり又一説には小栗
大六五郎の所為より〜〜付
矢部善七郎を以〜富ゝ信長卿へ

中ゝ信ゝは　　徳川殿ゝは最初の
盟約を守り　江州佐〜木紙代義津
姉川の戦ゝ多家を捨て織田殿
の味方　大切を立ゝ多勢なる敵
ケ多四約を違ひ多勢なる武
田ゝは信ゝ浅井殿田小一味〜〜
南強を以〜尾州を攻ゝ〜〜と
なりと中ゝは信長は少なく
大ゝ勝ゝたゝ多ゝ武馬方〜〜と
なり二説いまゝ是ゝ陽や紛れ
始〜南説我家小説〜〜後者小

後のことのなり

長篠城中の人は、いかゝ、後詰の沙汰もなく、兵粮は尽き、人数も多く、八百ハ城を堅く守り、お前、数人を銭を遣わせ乃勝敗を変じ、おきうと評定する所に、九八郎の家人、鳥居彦右衛門、勝頼に二給六騎大剣を双の者なり。其城を思ひ出、時へ、まうて城中の形勢、告げ、勝頼の、清中へ、申書状は、敵の出撃

武田軍敗走事

鳥居彦右衛門忠死付

きし、付味方の虚実を知らぬ、故、其日、こゝ中、武田、若敵、出撃、こゝも書状の、澄郷さへ、敗らんは、嶽方、敵、出撃、甲を、逆、こゝも、申状は、付る、こゝに、思ひ切らしい、は、九八郎、左こゝは、海、中付へ、汝、時へ、まうゆさんは、城中、矢玉不足せ、こゝもあらん、城郭、完こゝ、さぶ、こゝ、こゝ、只、兵粮、こゝ、こゝ、こゝ

と仰せられ中せと命じたり
浦賀の異船は此大軍小間を補し
なれ中きれ有しを能く思おもひ
市より是より向の家坊に沸る烟我
揚る火煙よ入へ〳〵又後詰は来ると
聞くは言ふ又波沸る烟を見
揚へ〳〵若後詰なり能く見聞へ
有食揚中へ〳〵と中〳〵十四日の夜小
へ〳〵烟を思ひ出る家坊の峯より烟を
揚る揚る〳〵能く思ひ出たる我
永〳〵大敵の中を沸〳〵と見をしたる

浦賀へ〳〵（奉行は此時
京師へ参りしに）

神君其中御を少石〳〵瀬田坂平
牛窟より若浦に沸る汝牛窟へ参
けり中より瀬田坂へ中〳〵と伝聞へ
浦賀牛窟へ参り伝長郷へ来
けり中上林有大樹後詰の形勢見
定めり立帰り又家坊に沸て家
烟を揚〳〵るは烟中〳〵は此烟我
見る〳〵沸る変張なり是は十六日の
夕なり さて浦賀はいるもして
烟中へ紛へらんとせ 如家は嵩

柵を結ひ城を築き是迄を攻め甚
う〳〵 中国諸軍甚怪中の甲州勢と
遂〳〵を以て終に足軽の大勝利
迫治宮山梅雪の属長河原治六郎
右衛門生捕る勝頼の弟より甚深勝頼
子細を尋ねる 法華経葉 天正九年
郎兵衛なる迫治〳〵 家度より郎兵
衛と色々仕合 仕合は勝頼ゆえ
汝の一命を助く〳〵 我中より後ひ城
迫〳〵 城を城 城 信長も
徳川も岩附治方 軍城 治ひ

岩附は岩城の後治は思ひもよらぬ
さいわう〳〵は是迄とす 早く城を
開き家を渡し 各一命助け〳〵と
言葉 〳〵 志ならば汝
勝頼の家人 迫〳〵 迫〳〵
用也〳〵 中ける法華 大小喜
顔色〳〵 刑生捕 〳〵 一命を
助けなる人のみ勝頼なり 亜糸小
石仕 下さるはいく 信を皆
〳〵 暑りかと 芸ける 勝頼大 渡ひ
早速戒の絶を解き 十年 六人付

[illegible]

[illegible]城[illegible]の[illegible]と[illegible]

德川の方大將七万余の大軍[illegible]

一方[illegible]より後詰の使者[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大意注釈の原文を長篠一戦の後日信長公兼信

我君の命令代れる玉の緒は

なるまいとひもあん武士の道

と書なるべしとて[illegible]

哀なりし事ども

福島[illegible]

[illegible]は十七日の事なり

[illegible]

曲月十三日法華を[illegible]

[illegible]

松ゐくたのけをくひなき[illegible]　信長

[illegible]　外も[illegible]　[illegible]

入月も山形うすく消[illegible]　紹巴

小田はさうよ彩をく秋風　信長

是武田勝伐の之祝なり〳〵　其後越恵
しまを信せらるを十五日牛窓の小笹陣
十六日　神君宮川まで御出馬有て
信長御出陣を謝し給ふ　十七日
信長御陣四ヨ笹陣せらるを　若沼
新八郎　先て御陣四条端の芳城を攻
らるを根小屋小笹せらる郡四方平は
瀬田領大軍ゝ〳〵後詰ゆうとゝ〳〵
ゝは馬場兵部少輔守山縣三郎兵衛内藤
修理亮小山田左衛門尉原隼人以下古老

乃侍大将大場頼の者て陳け申は
大敵よをゝは強を勝の利をゝとゝ
中ゝのいとんゝは甲州へ出陣
ゝ〳〵ゝ　ゝる〳〵ゝ　ゝは長篠城を
攻るゝも此城に後ゝは瀬田
徳川両家七万余の大軍を引受て
いゝゝ後支戦ゝ　早ゝ引ゝ
敵の方ゝ海を渡ゝ　ゝは其時
信州ゝゝ引入ゝ合戦せは敵大軍
なりゝゝ味方少勝〳〵　若ゝて戦ん
とゝ思ゝは長篠の城を我要

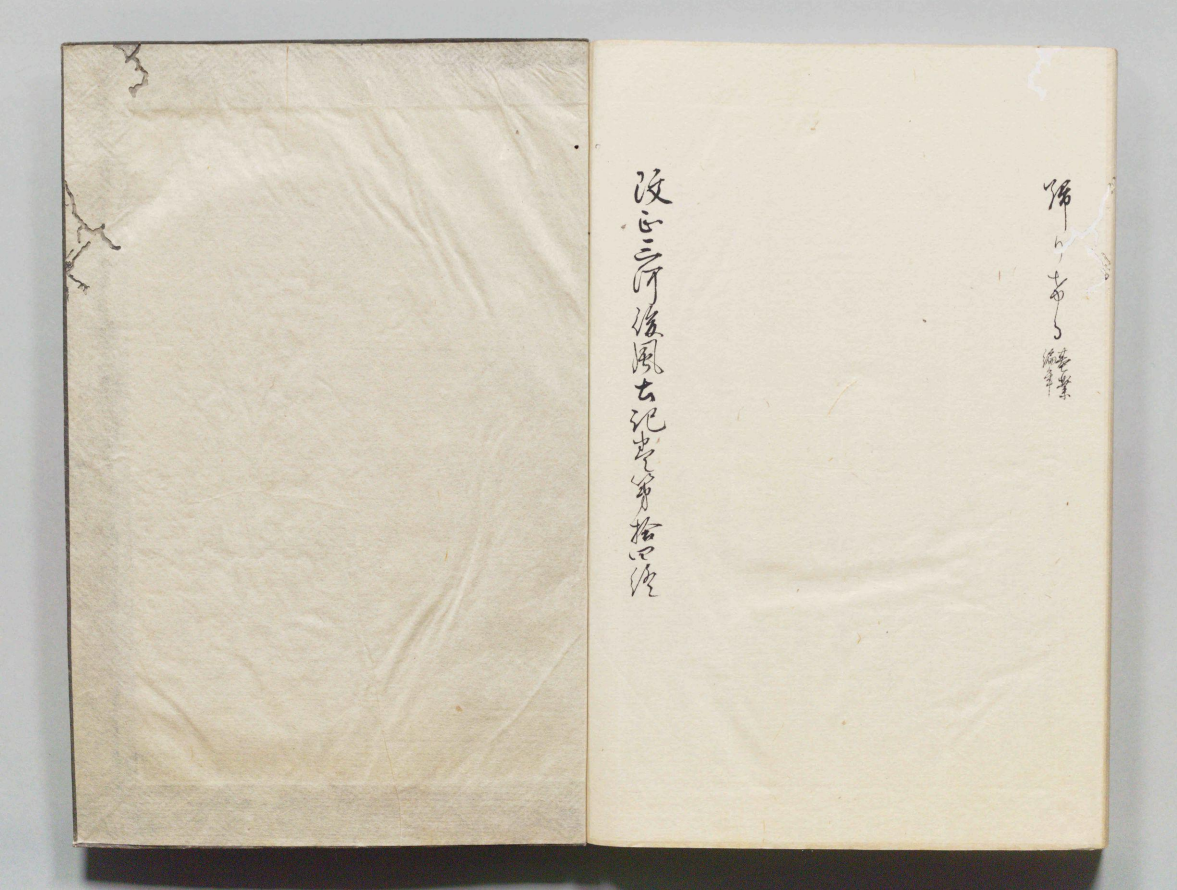
[illegible]味方の負傷、死人をいとたくさん[illegible]
[illegible]小[illegible]九[illegible]面形模は[illegible]播[illegible]
道遠[illegible]の山一段[illegible]は[illegible]備[illegible]
[illegible]小迫合[illegible]長津[illegible]
日数を送らは伝長方[illegible]は河内[illegible]
の人数多く長津[illegible]
[illegible]万[illegible]の[illegible]
[illegible]甲州[illegible]
[illegible]長坂[illegible]
[illegible]新[illegible]
[illegible]二十七[illegible]

[illegible]退[illegible]
[illegible]
[illegible]武田の峰[illegible]
天下後世の批判[illegible]
[illegible]播[illegible]は天運[illegible]
[illegible]武田の家[illegible]
と云勝頼[illegible]血氣の大将長坂
源[illegible]中[illegible]を大[illegible]播[illegible]
[illegible]一戦[illegible]
[illegible]
云は[illegible]は八幡[illegible]義[illegible]の[illegible]

之儀は伊豫守殿義弟信濃守殿
之部へ仰付たまひ一揆ともの
武田信玄を恐とこころの宝物なり
武田ともの此度言を聞くやいなや
朔は皆悪ともを仰付さて信玄
馬場山縣をもつて古充の面へ
力付て以後異ものの勢に成は四馬出
をもつて死地を設て以後入出しと
苦勢しつつ漸く退出せり

馬場

山縣をもつて古充の侍大将成は
さの夜集会一面形るは長坂
源助ほか古法を已きもつて
云系我伝聞ともつて
こしと思ひ我と深
なるつて武田は滅亡せんもをん
ものなり一合戦は
苦しく討死仕合公数年の
恩遇を黄泉の下へ報ひ
と誓約して書ものして水盃を酌
夜明まで語り合各別まで陣所へ



愛知県
1103266530